

『天路の旅人』(沢木耕太郎著)

山岳書ではないのでこの欄で紹介するには少々気が引けるが、情けないことに最近山に登る体力激減、従って山岳書を読む気力も眼力も激減と言うのが偽らざる実情なので悪しからずご了解をお願いしたい。併せて、少々長い駄文になったことも・・・。

さて。

邦人のチベットの探検記では、明治時代に仏教の原典を求めて厳重な鎖国体制下にあったチベットに単身入国した求道者・河口慧海師の『チベット旅行記』が著名であるが、その一方で、第二次大戦末期に特務機関密偵として中国大陸奥地に派遣されていた若者が西域方面の情報収集のために青海からチベットへの未踏の秘境を辿ってチベットに潜入し、以来8年間に亘って現地人ラマ僧に扮して西域の各地を放浪、死線を彷徨いながら往時の現地の紀行を書き残した人物のことは余り知られていない。この人物の名前を西川一三と言ひ、旅行記として『秘境西域八年の潜行』(3巻)という著書を残している。

日本の敗戦をチベットで聞いた彼は、この大陸の何処にも安住の地が無い追われた敗戦国の敵国人となったことを知り、蒙古人のラマ僧に化け続けて過ごすしか道が無かった。やがて日本人のスパイであることが露見しインド官憲に逮捕されて日本へ強制送還された後、数年間掛けて上記の書物を書き記した後はマスコミに登場することも無く、またその種の団体に加わることも無く、西域での稀有な体験や自著を宣伝することも無く、逝去する迄の半世紀を小さな商店を営みながら東北地方の片田舎に埋もれて静かに人生を閉じた人であった。

同じくチベットを探検した上記の河口慧海や多田等観、青木文教、木村肥佐生等の仏教学者や特務機関員が帰国後その筋で夫々名を売ったのに対して、西川一三という人は市井に埋もれた儘の名も無き忘れ去られた人であった。15年ほど前に鬼籍に入られたが、その訃報記事は僅かに一地方紙の極く片隅に淋しく報じられただけであった。

しかしながら、その著書『秘境西域八年の潜行』は、往時は日本では全く知られていなかった西域の政治、経済、文化、宗教を始め、庶民の日常生活などに至るまで生々しい情報が満載された地政学上・人文地理学上の情報の宝庫であり、このことは、作家井上靖や元南極観測隊越冬隊長西堀栄三郎、民族学者の泉靖一、同石田英一郎など錚々たるメンバーが彼のこの著書に序文を寄せていることから頷ける。

私もこの紀行に掲載されていた現地の珍しい風物や人物の写真に魅せられながら遠い異国の情景を想像しつつ、いつの日かチベット、ネパール、インドやヒマラヤを歩いて見たいものと夢想したものだ。もう半世紀も前のことであった。

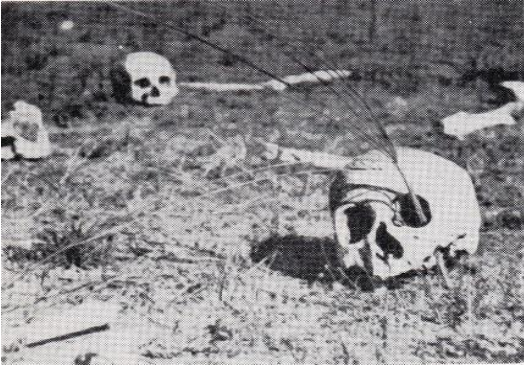


(「秘境西域八年の潜行」別巻)

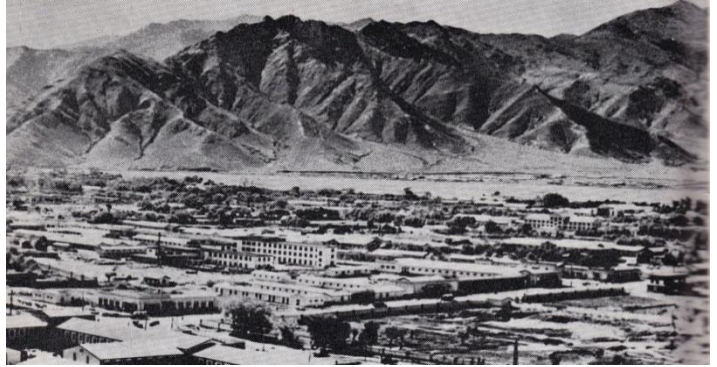


(若き頃の西川一三、「秘境西域八年の潜行」より引用)

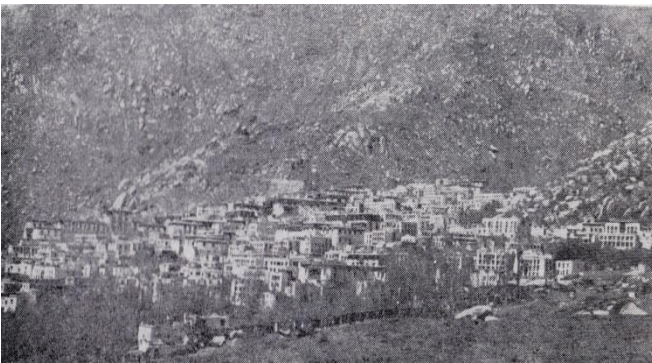
『秘境西域八年の潜行』の口絵の幾つかの写真からこの著書の中身を想像して頂ければ幸甚である。



(鬼気迫るゴビ砂漠の風葬風景)



(ラマ教徒のメッカ、首都ラサ。海拔 3860m の美しい街)



(西川が修行したラサ最大の僧院レボン寺。僧徒約 1 万人)



(チベットの機織り女たち)



(神秘的な仏画「天界抱合」(ヤリブユム))



(西川が持ち歩いたラマ僧装具。①デンデン太鼓、②お守り袋、③処女の大腿骨で作られた骨笛、④般若心経經典三巻)



(←ポロポロの僧衣を纏った巡礼ラマ僧。西川もこのような乞食姿で歩いたのであろう)

(同書の挿画より⇒)



さて、前置きが長くなったが、本題に入ろう。この蒙古人ラマ僧に化けた稀有な人物西川一三に注目した研究者やジャーナリスト、マスコミは殆ど居なかった。僅かに江本嘉伸著「西藏漂泊 チベットに魅せられた十人の日本人」の中で僅かに触れられている程度である。従って、西藏探検史の類を繙いて見ても彼の名前は殆ど出てこない。

しかし、この稀有な人物を掘り起こしてその波乱万丈の人生の実像に迫ってみたいと考えた人物がいた。「深夜特急」で有名なルポライター沢木耕太郎であった。沢木耕太郎の著書は、クライマー山野井夫妻の“一瞬の魔”の遭難事故を描いた「凍」を読まれた方も多いのではなかろうか。

それはともかく、自身も“旅人”である沢木は、何度も死線を彷徨いながら未知なる世界への歩みを止めなかったこの稀有な“旅人”西川の生き様に感じるところがあったのではなかろうか。

沢木は1ヶ月に1回の割で西川の住む盛岡を訪れ、1年間に亘って週末の2日間を盃を交わしながら彼に旅談義のインタビューを行なった。そのインタビューを基に今回の『天路の旅人』を著したのであるが、インタビューから刊行までに西川の逝去も挟んで25年間もの歳月を費やしたのは、そのような永い歳月を掛けないと描き切れないほど西川という人物の生き様と度量が大きかったのか、或いは対談する両者が肝胆相照らす仲となって人物ルポルタージュ創作の主客などという狭い舞台を飛び出した交友関係になっていたためかもしれない。おそらく、その両方であろう。沢木と西川は親子程の年齢差があったが、お互い同様な“旅”体験を介した間柄は年齢の差などは何の障害にもならなかったであろう。

さて、この『天路の旅人』は、著者の沢木耕太郎が西川一三の書いた『秘境西域八年の潜行』の生原稿や刊行された同名の芙蓉書房版、中公文庫版、他の参考文献、往時の地図、ひいては現在のグーグル・アース情報なども考証して、西川が辿った西域のルートのを忠実に机上で辿りながら、1年間に及ぶインタビューで西川が吐露した西域探検への熱情と心情を織り込んで完成させた西川一三という人物の西域の旅の足跡を辿ったノンフィクションである。

西川が書いた『秘境西域八年の潜行』の生原稿は4百字詰め原稿用紙で3,200枚という膨大なものだったそうであるが、本にするに当って出版社の編集者がこれを大幅にカットしたために、生原稿のかなりの部分が散逸してしまい、出来上がった3巻本は時間や場所の繋がりが無くなった部分が多く、その意味では読みづらい本になっていた。これを改定したという中公文庫版3巻も同様であったそうだ。

沢木は、この『秘境西域八年の潜行』を『天路の旅人』に衣替えするに際して、上に述べたような厳密な考証を行なって読み易い文脈に書き直すと共に、托鉢僧として砂漠や荒野を彷徨い、また高山病や凍傷に悩まされながら荷物運搬人夫や苦行僧として10回もヒマラヤを越え、死線を彷徨いながら西域の奥へ奥へと歩き続けた西川一三という人物の折々の心情も浮かび上がらせたものとなっている。

沢木耕太郎の作品は「深夜特急」に代表されるように、天衣無縫、緩急自在、山あり谷ありのダイナミックな筆致が躍動している作品が多いが、本書は上記のような経緯から他者の足跡を辿ったフォロー紀行であるために旅の躍動感とリアル感には些か欠けるが、逆に言えば西川が彷徨った鬱蒼とした森や茫洋とした砂漠から彼が辿った一本の細い路がくっきりと浮かび上がる構図となっている。

暇が有り余っている方々は、『天路の旅人』と『秘境西域八年の潜行』の両者を読まれば、尚一層の興味湧くのではなかろうか。

沢木耕太郎著『天路の旅人』：新潮社2022年10月刊 本体2,400円。

(参考) 西川一三著『秘境西域八年の潜行』：芙蓉書房版(3巻本)1967年刊、各900～1500円)。

中公文庫版3巻本(1990年刊)。何れも絶版。 [引用の写真・挿絵は何れも芙蓉書房版より]

(酎 2022年11月記)